【ポスターセッション】

障害者ソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスと理論的枠組みの構築

－文化モデルアプローチとインペアメント文化論との融合をもとに－

○　四天王寺大学　　原　順子（001134）
松岡 克尚（関西学院大学・001808）、宮崎 康支（関西学院大学大学院・009599）

キーワード３つ：インペアメント文化、ろう文化、カルチュラル・コンピテンス

１．研 究 目 的

ソーシャルワークにおいては、昨今はさまざまな文化的背景を有するクライエントが増加してきており、そうした人々を対象とする多文化ソーシャルワークが日本においても注目されるようになってきている（石河 2014、ヴィラーグ 2018）。中でも、聴覚障害者を対象としたソーシャルワークでは、ろう文化を尊重した取り組みを「文化モデルアプローチ」と称されている（原 2015）。このアプローチでは、ソーシャルワーカーの「文化的感性」（Sheridan et al. 2010）やカルチュラル・コンピテンスが重視されており、その支援目標にはろう文化と聞こえる文化の関係性改善や相互理解促進が含まれてくる（原 2015）。

本発表は、聴覚障害ソーシャルワークで提唱されたこの文化モデルアプローチを、聴覚障害者に限定されず障害者ソーシャルワーク一般においても拡大適用していくことを目指し、「ろう文化を尊重したソーシャルワーク実践」の中に、後述するインペアメント文化をどのように位置づけていくことができるかを理論的に探ることを目的とする。

インペアメント文化とは、インペアメントのある身体が紡ぎ出した生活様式・傾向をインペアメント文化として位置づけたものである。また、この生活様式（インペアメント文化）は更に環境の側が有するディスエイブリングな特徴からも影響を受け、一部で規定されるが、こちらは障害者文化と呼ぶことにする。この障害者文化とはインペアメント文化とディスアビリティとによる共同産物を意味していると同時に、インペアメントを有する者の「生きる戦略」や「経験知」を構成しているものである（松岡 2018）。

２．研究の視点および方法

文献レビューを実施し、ろう文化の構成要素を抽出し、かつ文化の定義に鑑みて、インペアメント文化との比較検討を行った。さらに、多文化ソーシャルワークでのインペアメント文化の考え方を反映させたカルチュラル・コンピテンスについての先行研究レビューを実施した。以上を踏まえて、発表者が以前に提唱した「ろう文化を尊重したソーシャルワーク実践のカルチュラル・コンピテンス」および「聴覚障害ソーシャルワークの理論的枠組み」にインペアメント文化を取り入れ、「障害者文化を尊重したソーシャルワーク実践のカルチュラル・コンピテンス」に関して理論的に検討した。

３．倫理的配慮

「日本社会福祉学会研究倫理規程」を遵守して研究を行った。また、本研究は科研費16K004224（研究代表者：松岡克尚）の助成を受けている。

４．研 究 結 果

ろう文化については、先行研究より①独自の言語 ②共通の生活様式や行動様式 ③共通の文化的価値観 ④独自の芸術やユーモア ⑤共通の歴史観を構成要素とした。インペアメント文化との関連を検討した結果、いずれともに「聞こえない」というインペアメントを有する身体が構築したという点で共通性を認めることが出来、かつ同じ身体性に規定された集団に共有されるものであるという点で、ろう文化の基底にろう者のインペアメント文化の存在を認めることができた。

また多文化ソーシャルワークにおいては、多様な文化的背景を持つクライエントの中に障害者をもカバーしている先行研究（Gilson&DePoy2002、Sue2006、Dupré2012、May&LaMont2014）から、障害者はインペアメント文化を有する存在であり、多様な文化的背景をもつ集団の一つであると捉えることができた。この観点からソーシャルワークにおいてはインペアメント文化を認識したカルチュラル・コンピテンスがソーシャルワーカーに求められるということが確認できた。

以上を踏まえて、７つの要素からなる「聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンス」および理論的枠組みを土台にして､「障害者文化を尊重したソーシャルワーク実践におけるカルチュラル・コンピテンス」と理論的枠組みの試案を導出することができた。

5. 考 察

インペアメント文化の概念を導入することで、聴覚障害ソーシャルワークの「障害者ソーシャルワーク」化が果たされ､「文化モデルアプローチ」は障害者領域におけるソーシャルワーク全般に適用できるものへと発展させることができたと考える。構成要素に関しては手話という言語を有するろう文化と独自の言語を有しないインペアメント文化とでは、完全な理論的一致はないものの、文化的視点を有するという点では一致する。

同時に、インペアメントという身体的側面に注目することにより、医学モデルに傾斜しているという批判を生む可能性があると考える。これに対してどう反論していくかが理論的な課題になってくる。

文献（紙面の関係上、一部のみ記載）

原順子（2015)『聴覚障害者へのソーシャルワーク―専門性の構築を目指して』明石書店.

松岡克尚（2018)「インペアメント文化のとらえ方とその可視化：障害文化、障害者文化との比較を通して」Human Welfare, 10(1): 79-91.